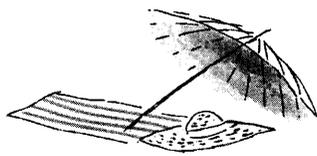


芋の花穂

宮坂静生



秋の幹百年後の日射し澄み
ウインナのわづかな曲り秋さりは
フロントガラスをとんぼが滑りゆく朝よ
粉つぽきりんご朝から晴れマーク
裸婦像をすべる秋風少し巻く
髭撫づる星夜に荒れし牧の草
芋のざんざ流の国信濃人
流—流人



芋の花穂長け逝くを待たれるる
角力草四股踏み伸ぶる日の盛り
雌日芝の星のつぶやき聴きもらさず
賢治忌へあけづ・けろける・かがみつちよ
虫の音の天上に縋ふ綱は紅
青穂田をかさねて佐久や一遍忌
鉄に鉄付ける鍛冶の九月かな
黒杏の遺影羣鳥羞を養ふ
黒田杏子偲ぶ会（九月十七日 如水会館）
白露三候—九月十七日頃